世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『馬小屋の寒い夜』（仮）

第 39 話

提供 ハウス食品工業

制作 日本アニメーション
フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第三九話「馬小屋の寒い夜」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
（ジェシー）
（ガートルード）

モリー
ジェームス
ラム・ダス
クリスフォード

エミリー（人形）
シーザー（猫）
メルの一家（ネズミ）
ボリス（アフガン犬）
ハリジャン（猿）

1

ミンチン女学院・屋根裏部屋（夜）

（第38話より）

威丈高にセーラを見おろすミンチン――

ミンチン「全く。煙突掃除やピーターを使って、こんな事をさせていたなんて」

思わずセーラ、ベッキーと顔を見合せる。

ミンチン「フン、どうせ、あの連中に盗んで来させた品物でしょう。ジェームス、構わないから、全部取上げておしまい！」

ジェームス「へい、院長先生！」

ジェームス、片はしから壁掛けをはがし、毛布を丸め、ドア外へ放り投げる。

ミンチン「セーラ、お前には、もう、この屋根裏部屋に住ませる訳には行きません。さ、来るんです！」

2

同・馬小屋の中（夜）

（第38話より）

扉が開き、突き飛ばされてワラに倒れ込むセーラ――

モリー「フン、院長先生が、お前の寝倉は、今夜からそこだとさ」

バタンと扉をしめて、モリー、去る。

エミリーと写真額を拾い上げるセーラ。

3

同・全景（翌朝）

点燈夫が、ガス燈の灯を消しに来る――

ヒュウと吹き抜ける木枯し――

4

同・馬小屋の中

その木枯しが、カタカタンと、下げられた明り窓の板戸を音立てて行く——

×　　×　　×

仄暗い一隅のワラの上に——エミリーと写真額を胸に抱いて、母屋の煉瓦壁に凭れて眠っているセーラ。

再び、明り窓の音がする——

ふっと眼をさますセーラ、肩をすぼめる。

セーラ「ああ、もう朝なのだわ……」

5

セーラ、抱いていたエミリーに話しかける——

セーラ「お早う、エミリー……寒かったわね、大丈夫？」

セーラ、自分に云うように続ける。

セーラ「エミリー……ここが、どこだか、判っていて？……そうよ、ここは、お父様が買って下さったポニーの馬小屋だったのよ」

フラッシュ

ヒヒーンといななくジャンプ――

セーラ「あ、ジャンプ、待ってったら！」

ピーター「お、お嬢様！」

せっつくジャンプにニンジンをやる12話以前のセーラと

ピーター、笑声をたてる。

6 同・馬小屋の中

じっとエミリーを見るセーラ、続ける。

セーラ「そうよ、エミリー……私たち、とうとう、その馬小屋で、寝たり起きたりする事になってしまったのよ……」

セーラ、吐息する――

セーラ「さ、もう、台所へ行かなくては……じゃ、エミリー、寒くて、淋しいけど、ここで待っていてね」

セーラ、そっと、エミリーを壁にもたせかける。

今度は、写真額をとり、話しかける。

セーラ「ごめんなさい、お父様……こんな所へ連れて来てしまって……お母様も許して……じゃ、行って来ます……」

セーラ、写真額をエミリーの隣りに立てかけると、立上る。

7 同・馬小屋の外

重い扉が開き、出て来るセーラ——
吹き抜ける寒風に、思わず両腕を抱き、裏庭の方へ廻り込む。

8 同・裏庭の入口

廻って来たセーラ、階段を降りると、ドアに入って行く

——

9

同・ベッキーの部屋

何処からか教会の鐘が鳴っている——

がばっと、ベッドで起上るベッキー、急いでベッドを出る——

10

同・屋根裏の廊下

着がえたベッキーが、自室から出て来ると、そっとセーラの部屋を開けてみる。

×　　×　　×

ガランとした部屋の中——勿論、セーラの姿はない。

×　　×　　×

ベッキー、急いで階段口へ――

11 同・三階廊下

屋根裏への階段口から出て来るベッキー。
眠っていたシーザーが、起き立つと、ニャオとすがり寄る――

ベッキー「シィッ……」
ベッキー、いそいで階段を降りて行く。

12 同・地下の階段附近

探しながら降りて来るベッキー、小声で呼んでみる――

ベッキー「お嬢様……」
――返事がない。

13

同・台所

×　　　×　　　×

ベッキー、使用人室の前に来ると、そっとドアをあけて、覗く——

——高鼾きが聞える。

×　　　×　　　×

室内の二つのベッドに——例のセーラの部屋から没収した豪華な毛布にくるまって高鼾きのジェームスと、モリー。

ジェームスが、大きく唸って寝返りを打つ——

×　　　×　　　×

慌ててドアを閉めるベッキー——一方へ探して行く。

探しながら入って来るベッキー、はっと見る——

――炉の前で火を起しているセーラの姿。

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ、振返って立上る――

セーラ「ベッキー……」

ベッキー、駆け寄る――

ベッキー「お嬢様……心配してたんでございます。昨夜はどこにお寝みになったのかと」

セーラ「有難う、ベッキー……なんとか寝めたわ、ワラが沢山あって」

ベッキー「えっ……そ、それじゃ、馬小屋に……？」

セーラ「ええ……仕方がないわ。私達の、あの魔法は、終ってしまったのですもの」

ベッキー「お嬢様……」

その時、のっそりと入って来るジェームスと、モリー。

ジェームス「いやあ、よく寝た、よく寝た」

モリー「毛布がいいと、よく眠れるもんだねえ」

二人、笑う――

はっと見合うベッキーとセーラ――

セーラ「お、お早うございます。ジェームスさんに、モリーさん」

ジェームス「なんでえ、起きてたのかい……いま昨夜お前から頂戴した毛布の事を話してた所だ……うわッはっはっは」

セーラ、その嘲笑に耐える――

モリー「なんだい……お前、私たちが、あの毛布を使ったのが気にいらないとでも云うのかい」

セーラ「い、いえ……そんな事は……」

モリー「フン、取上げろと仰言ゃったのは、院長先生なんだからね……さあさあ、寒いからって、火起しばかりしてないで、朝食の支度にかかるんだよ！」

セーラ「はい、モリーさん……」

14

同・一階廊下

振鈴を鳴らすアメリア――

15 同・地下の食堂

朝食のパンを配り、スープを注いで廻っているセーラとベッキー――

アーメンガード、ロッティ以下、女生徒たちが入って来る。

ロッティ「あ、セーラ・ママ！」

アーメンガード「セーラ！」

セーラ、顔をあげる――

セーラ「あ、ロッティに、アーメンガード……」

ロッティとアーメンガード、セーラに駆け寄って来る。

ロッティ「セーラ・ママ、大丈夫だったの？」

アーメンガード「私、昨夜、あなたが連れられて行く所を見て、この

学院を追い出されるんじゃないかと思って……」
ロッティ「そうよ、私、心配で心配で、眠れなかったのよ」
セーラ「有難う、ロッティにアーメンガード……でも、心配しないで……ここを追い出されたりはしなかったのよ……ほら、こうして働いているでしょ」
ロッティ「じゃ、今度は、屋根裏じゃなくて、どこのお部屋になったの？」
セーラ「お、お部屋って……それは……」
その時、一方から、笑声が起る——
ラビニアの声「決ってるじゃないの」
はっと見るセーラ、ロッティ、アーメンガードたち——
振返った女生徒たちを分けて、ラビニア、ジェシー、ガートルードが近づく。
ラビニア「フフ、あれ程院長先生を怒らせたんですもの。他に、寝かせて貰える所があるとすれば……馬小屋だけよ」

――炉の前で火を起しているセーラの姿。

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ、振返って立上る――

セーラ「ベッキー……」

ベッキー、駆け寄る――

ベッキー「お嬢様……心配してたんでございます。昨夜はどこにお寝みになったのかと」

セーラ「有難う、ベッキー……なんとか寝めたわ、ワラが沢山あって」

ベッキー「えっ……そ、それじゃ、馬小屋に……?」

セーラ「ええ……仕方がないわ。私達の、あの魔法は、終ってしまったのですもの」

ベッキー「お嬢様……」

その時、のっそりと入って来るジェームスと、モリー。

ジェームス「いやあ、よく寝た、よく寝た」

モリー「毛布がいいと、よく眠れるもんだねえ」

二人、笑う――

はっと見合うベッキーとセーラ――

セーラ「お、お早うございます。ジェームスさんに、モリーさん」

ジェームス「なんでえ、起きてたのかい……いま昨夜お前から頂戴した毛布の事を話してた所だ……うわッはっはっは」

セーラ、その嘲笑に耐える――

モリー「なんだい……お前、私たちが、あの毛布を使ったのが気にいらないとでも云うのかい」

セーラ「い、いいえ……そんな事は……」

モリー「フン、取上げろと仰言ゃったのは、院長先生なんだからね……さあさあ、寒いからって、火起しばかりしてないで、朝食の支度にかかるんだよ！」

セーラ「はい、モリーさん……」

14
同・一階廊下

振鈴を鳴らすアメリア――

15

同・地下の食堂

朝食のパンを配り、スープを注いで廻っているセーラとベッキー――

アーメンガード、ロッティ以下、女生徒たちが入って来る。

ロッティ「あ、セーラ・ママ！」

アーメンガード「セーラ！」

セーラ、顔をあげる――

セーラ「あ、ロッティに、アーメンガード……」

ロッティとアーメンガード、セーラに駆け寄って来る。

ロッティ「セーラ・ママ、大丈夫だったの？」

アーメンガード「私、昨夜、あなたが連れられて行く所を見て、この

学院を追い出されるんじゃないかと思って……」
ロッティ「そうよ、私、心配で心配で、眠れなかったのよ」
セーラ「有難う、ロッティにアーメンガード……でも、心配しないで
……ここを追い出されたりはしなかったのよ……ほら、こう
して働いているでしょ」
ロッティ「じゃ、今度は、屋根裏じゃなくて、どこのお部屋になった
の?」
セーラ「お、お部屋って……それは……」
その時、一方から、笑声が起る――
ラビニアの声「決ってるじゃないの」
はっと見るセーラ、ロッティ、アーメンガードたち――
振返った女生徒たちを分けて、ラビニア、ジェシー、ガ
ートルードが近づく。
ラビニア「フフ、あれ程院長先生を怒らせたんですもの。他に、寝か
せて貰える所があるとすれば……馬小屋だけよ」

ロッティ「えッ、馬小屋……？」

アーメンガード「そ、そんな……」

　騒然とざわめく女生徒たち――

ラビニア「どう？　違って？」

　冷笑でセーラを見て、追い打つ――

ラビニア「どうしたの？……みんな聞きたがってるんだから、あなたの口から云ったらどう？」

　セーラ、じっとラビニアを見て口を切る。

セーラ「そうよ……あなたの云う通りよ……私は、いま馬小屋で寝起きしているのよ」

　どよめく女生徒たち――

ラビニア「フフ、聞いたでしょ、みんな……こちらのお嬢様はね、昔、お飼いになってた馬小屋に、今は住んでいらっしゃるんですって」

　どっと笑うラビニア、ジェシー、ガートルード――

アーメンガード「セ、セーラ……」

ロッティ「（泣顔）セーラ・ママ……」

　凝然とラビニアを見て立尽すセーラ。

　一方で、ベッキーが泣きそうな顔でセーラを見守っている。

　その時、入って来るミンチンとアメリア。

　ラビニア以下、女生徒たち、一斉に自席につく――

ラビニア「お早うございます、院長先生……」

女生徒達「お早うございます、院長先生……」

ミンチン「お早う……」

アメリア「お早う、みなさん……」

　ミンチン、ジロリとセーラに眼を向ける。

　はっとして挨拶するセーラ――

セーラ「お早うござ……」

ミンチン「お黙り！」

セーラも女生徒たちも一斉にシンとなる。

ミンチン「よくも抜け抜けと、そんな挨拶を……私は、お前を許した訳ではないのですからね」

アメリア「お、お姉様……」

ミンチン「（焦々と）眼ざわりです。台所へお退り！」

セーラ「は、はい、院長先生……」

セーラ、空になったパン篭を手に、そっと出て行く——

心配気に見送るベッキー。

泣顔で見送るロッティ、アーメンガード。

冷笑して秘かに顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルードたち——

16 同・台所

戻って来るセーラ、撫然と考え込む。

モリーが来てまくしたてる――

モリー「さあさあ、ボヤボヤしてないで……今日は冷え込むから、院長先生に文句を云われないうち、教室に火を入れとくんだよ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

17 同・地下の石炭置場

懸命にスコップで石炭をすくっては、バケツに入れるセーラ―― 重そうにそのバケツを運んで行く。

18 同・一階廊下

振鈴を鳴らすアメリア――

19 同・教　室

暖炉で、石炭を燃やしているセーラ。
ラビニア以下の女生徒たちが入って来る。
ラビニア「なによ、まだ教室温めてなかったの？　風邪引いちゃうわ」
セーラ「ごめんなさい。石炭が湿っていて……」
ラビニア「なんとか云って、自分だけあたってたんでしょう。どいてよ！」
セーラを押しのけると火にあたる。
凝然と立つセーラ——
その時、ミンチンが、老女教師を連れて入って来る——
一斉に席につくラビニア以下の女生徒達。
ミンチン「紹介します……今日から皆さんにフランス語を教えて下さるパスカル夫人です」
セーラ、はっと見る——
ジロリとセーラに気がつくミンチン——
ミンチン「なにをしているのです……お前には関係のない事です。出

てお行きなさい」
セーラ「は、はい、院長先生……」
セーラ、石炭バケツを持つとドアへ――

20 同・廊下

セーラ、出て来ると歩き出す――
教室から女生徒たちが挨拶する声が聞える――
女生徒たちの声「ボン・ジュール・マダム・パスカル……」
ふっとセーラの足がとまる――吐息すると、また重い石炭バケツを手に歩き出す。

（中CM）

21 同・地下作業場

皿や鍋など朝食後の食器を洗っているセーラとベッキー

――

そこへモリーが、例の没収した銀の食器やスープの容器を抱えて入って来る。

モリー「さ、これもついでに、よく洗って磨き上げといとくれ」

振向いたセーラ、唖然と見る。

ベッキー「お嬢様……」

モリー「（ジロリ）なんだよ、お前たち……どうせこんな立派な食器は、お前たちには用はないだろ。私らが使ってあげるから、安心おし、フフフ」

――

途端に、大きな銀のスープの容器を足の先にすべり落す

モリー「あいたッ……いたあ……」

顔を見合せるセーラとベッキー。

その時、入って来るジェームス——

ジェームス「おい、セーラ、買出しに行く時間だぞ」

セーラ「はい、ジェームスさん」

モリー「ちょっと！……お前さん、院長先生に云われたこと、忘れたのかい？」

ジェームス「おっと、いけねえ。セーラを表へやっちゃ、まずいんだったな」

モリー「そうさ。また市場でピーターから食物でも貰うといけないからだってさ」

ジェームス「判ってるよ……じゃ、今日から買物は、ベッキーだ。いいな」

ベッキー「は、はい……」

ベッキー、心配そうにセーラと顔を見合せる。

22

同・使用人階段の下

買物篭を手に出て来るベッキーと、送って出るセーラー――

ベッキー「じゃ、お嬢様、行って参りますです」

セーラ「お願いね。もし、ピーターに逢えたら、私の事は心配しないでって」

ベッキー「はい、お嬢様……」

ベッキー、階段を上って行く――

じっと見送るセーラ――

モリーの声「セーラ！……一体どこにいるんだい。お前に手伝わせる仕事があるんだよ」

セーラ、急いで中へ引返す――

23

同・表

吐息をついて、街路を歩き出すベッキー。

24

クリスフォード家の居間

窓辺で――その姿をじっと見送っている肩にハリジャンをのせたラム・ダス、静かに振返る。

暖炉の傍に、車椅子のクリスフォードと脇に蹲るボリス。

クリスフォード「どうだね?……お隣りの屋根裏の少女の様子は……?」

ラム・ダス、首を振る――

ラム・ダス「残念ながら、買物に出かけたのは、ベッキーと云うメイド一人でした」

クリスフォード「すると……矢張り、昨夜のことで、手ひどい仕置きを受けているのだろうか」

ラム・ダス「恐らく、そうだろうと存じます……御主人様からの品物

は、全て取上げられてしまったようでございますし……」

クリスフォード「可哀想に……」

25 ミンチン女学院・地下の使用人室の前

待っているセーラの前に――開いたドアの中から、例の没収した毛布を抱えて出て来るモリー。

モリー「さ、これを干しといておくれ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

26 同・裏　庭

毛布を抱えて出て来るセーラ、ロープにその毛布を拡げる――

ふと、隣家の建物を見上げる――

セーラのM「ごめんなさい……私、折角の御親切を、メチャメチャにしてしまったんです……」

27 コベント・ガーデン市場

——買出人たちの風景。

28 同・花屋の店先

店番のピーターの前に、来ているベッキー。

ピーター「なんだって?……お嬢さんが、あの馬小屋に?」

ベッキー「そうなのよ、ピーター……院長先生は、その魔法のご馳走を、あなたが運び込んだに違いないって、思い込んでるのよ」

ピーター「そ、そんな馬鹿な……」

ベッキー「お嬢様は、心配しないでって仰言ゃってるけど、私、もう、
お嬢様がお気の毒で、どうしていいか……」
ピーター「そうだったのか……よし、ベッキー、オレ、一緒に行くよ」
ベッキー「え……」
ピーター「お嬢さんを、このままにしておく訳には行かないんだ！」
ベッキー「ピーター……！」

29

ミンチン女学院・屋根裏部屋

テーブルの上に、土足で上ったジェームスが、板切れを天窓に、X型に金づちで打ちつけている——
その下で—— 板切れを抱えさせられて見上げているセーラ。
ジェームス、打ち終り、天窓が開かない事を確かめる——
——

ジェームス「ようし……これで、ピーターだろうが、煙突掃除だろうが、入って来れやしめえ」

ドサッと床にとび降りる——

×　　　×　　　×

壁穴の前で、見上げていたメルの一家が驚いて鳴声をたて、穴に飛び込む。

×　　　×　　　×

ジロリと、気がつくジェームス——

ジェームス「むむ?……ネズミめ、こんな所へ穴をあけやがって……貸しな」

セーラが抱えている板切れを一枚とると壁穴にあて、釘をうちはじめる。

茫然と見るセーラ——

セーラのM「メル……許して……」

力まかせに釘を打つジェームス、一瞬、釘を押えていた自分の指をしたたか打つ。

ジェームス「あいたたた……」

その時、モリーの声が聞える——

モリーの声「セーラ……そこが終ったら、こっちの仕事を手伝うんだよ」
セーラ「はい、モリーさん……」

30 同・裏庭

セーラ、来て、乾してある毛布を取り込む――
そこへ、地下の階段から現われるベッキー――
ベッキー「お嬢様……」
セーラ「どうしたの、ベッキー」
駆け寄ったベッキー、セーラに何事か囁く―― 驚くセーラ。
セーラ「えッ、ピーターが……」

31 同・表

木戸の前で窺っていたピーター、決意すると、その木戸をよじのぼる――

32 同・木戸の内側

木戸によじのぼったピーター、中に飛び降りる――
その時、裏庭の方から駆けて来るセーラ。

セーラ「ピーター……！」
ピーター「あ、お嬢さん……！」
セーラ「どうして……どうして、こんな所まで……」
ピーター「お嬢さん！……オレ、お嬢さんを迎えに来たんです！」
セーラ「えッ……」
ピーター「こんなひどい学院にお嬢さんがとじ込められてるなんて、オレ、もう我慢が出来ないんです……お嬢さん、オレの家に来て下さい。せまくて汚いけど、食べて寝る位、オレが

なんとかします……こんな所にいるより、よっぽどましです」

セーラ「ありがとう、ピーター……でも……でも、駄目なの。ここを出る訳には行かないのよ」

ピーター「なぜです。なぜここを出る訳に……」

セーラ「判って、ピーター……私、今、負けそうになる自分に、勝とうとしているのよ……今逃げたら私、自分の弱さに負けた事に……（絶句して唇を噛む）」

ピーター「お嬢さん……」

33 同・一階の階段踊り場

そのセーラとピーターの姿を——窓ごしにじっと見つめているラビニア。

ふと、背後に声——

声　「ラビニア……」

ラビニア、はっと振返る――

思いつめた表情で立っているアーメンガード。

アーメンガード「教えて！……なぜ、あなたって、あんなにセーラをいじめなきゃいけないの？……なぜ、そんなにセーラを憎むの？」

ラビニアの顔に、冷やかな微笑みが浮び上る――

ラビニア「フフ……私が、なぜ、セーラを憎むか、ですって？」

アーメンガード「え、ええ……」

ラビニア「もう、憎んでなんていないわ」

アーメンガード「えッ？」

ラビニア「そりゃ、セーラが初めて私の前に現われた時は、憎んだかも知れないわ……だって、私よりお金持ちで、私よりフランス語が出来て、おまけに私より美人に見えたんですものね」

茫然と聞くアーメンガード――

ラビニア「でも、今は違うわ……セーラが、私よりお金持ちの筈はないし、フランス語どころか、台所のメイド……服だってボロで、私より美人だなんて、とても見えないでしょうからね」

アーメンガード「じゃ、どうして……?」

ラビニア「フン……教えてあげましょうか……それはね、セーラが、落ち目になったクセに、ちっともこたえた振りを見せないからよ!……それが許せないのよ!」

ラビニア、云い捨てると、パッと階段を駆け上って行く

――

茫然と見送るアーメンガード――

34 同・表(夜)

――灯っているガス燈。

ミンチン女学院の窓明りが、ひとつ、またひとつ消えて行く――

35 同・地下作業場（夜）

洗い物をしているセーラとベッキー――ようやく終る。

セーラ「さ、やっと終ったわ」

ほっと息をつくセーラとベッキー。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「え？」

ベッキー「また、今夜も、あの馬小屋でお寝みになるんでしょうか」

セーラ「（淋しく微笑）仕方がないわ」

ベッキー「いけませんです、お嬢様……こんなに冷え込んで来てるのに、あんな所でお寝みになったら、死んでしまいますです」

セーラ「でも……」
ベッキー「さ、屋根裏の私の部屋へ参りましょう。二人で寝れば、火なんかなくても温まれますです」
その時、ぬっと入って来るモリー。
モリー「そうはさせないよ」
はっとなるベッキーとセーラ。
モリー「院長先生から、セーラには、たっぷり仕置きをするように云われてるんだからね……ベッキー、お前は屋根裏へお行き！」
ベッキー「は、はい……それじゃ、お嬢様、お寝みなさいまし」
セーラ「おやすみ、ベッキー」
ベッキー、そっと出て行く——
モリー「さ、お前は、馬小屋だよ」
セーラ「はい、モリーさん……お寝みなさい」

36　同・裏庭（夜）

吹きすさぶ木枯し——　出て来たセーラ、肩をすぼめて
馬小屋の方へ。

37　同・馬小屋の中（夜）

入って来るセーラ、どっとワラの上に坐り込む——倒
れた写真額をとりみつめる。

セーラのM「お父様……私、本当は、くじけそうなんです……ここで
耐えて行く事に……」

そのセーラの眼から、涙が溢れ出て来る。

（第三十九話終）